

三重県立上野高等学校
同窓会報

VOL.21

白 HAKUA 亜

事務局：〒518-0873
三重県伊賀市上野丸之内107
上野高等学校内
TEL & FAX：0595-24-2231
ホームページ：
http://www.mie-c.ed.jp/hueno/?page_id=5292
E-mail：hakua@ict.ne.jp



浅井絵利香さん(高56回)

あさい・えりか 伊賀市出身。55回生で入学し、一年間の留学を経て56回生で卒業。金沢大学医学部保健学科検査科学専攻。同大学院医学系研究科医科学専攻(小児科)で医学部修士を取得。臨床検査技師となり、大阪で臨床開発職に就く。その後結婚し二児の母に。キャリアアップのための転職も経験したが、ウクライナへ移住するため退職。

夫の母国、ウクライナのキーウから幼子2人を連れて、苦難の道
りを耐えて郷里の伊賀上野に帰った浅井絵利香さん。帰国までの苦勞
と今後の希望について話を聞かせてもらった。

死も覚悟して 国境を越える

楯となり子どもを守って死ぬるなら
母親として本望、そう考え遺書まで書
いたという。その時、故郷の伊賀上野
城がウクライナの国旗と同じ青と黄色
でライトアップされている様子をツイ
ッターで知る。「絶対に生きて伊賀へ
帰ろう」、そう誓い、気持ちを振るい
立たせた。

ウクライナ人の夫と結婚後は大阪に
いたが、キーウで一人暮らしの夫の母
を気遣い、昨年三月に家族でキーウ
へ。そしてわずか一年足らずで突然の
ロシア軍の侵攻が始まった。二〇一四
年のウクライナ紛争以来、クリミア半
島とウクライナ東部では親露派武装勢
力やロシア軍とウクライナ軍との対立
は続いていたが、国土は日本の一・八
倍もあるため、首都キ

戦火のウクライナから幼子と帰郷

キーウにまでミサイルは
飛んで来ないだろうと
多くの市民が油断して
いた。ところが、二月
十一日、外務省の危険
レベルが4に引き上げられたため、子
どもの安全を考え帰国を決断する。夫
と義母はキーウに残ることにした。
が、渡航直前のPCR検査で陽性とわ
かり、親子とも発熱。回復した頃には
渡航チケットは取れなくなっていた。

二月二十四日、ロシア軍の攻撃がつ
いにキーウでも始まった。その日の早
朝、落ちていくミサイルと爆音、煙が
自宅マンションの窓から見えた。翌日

手前まで向かい、歩いて国境を越える。
何キロあったのか何時間かかったのだ
ろうか。その時も若い男性が荷物を持
ち最後まで一緒に歩いてくれた。

思いがけず 同窓の人の助けが

スロバキアに入ると、国境警備隊の
助けにより、ボランティアの車でチェ
コへ向かうことができた。そしてブラ
ハで、思わぬ人と出会うことになる。
浅井さんのツイッターを見て、大使館
へ支援を申し出てくれた現地在住の日
本人女性。この人はなんと伊賀市出身
で、しかも上野高校卒業生だった。

子どもたちは連日のストレスから体
調を崩していたが、自分の子どもと年
齢が近いこともあって、とても親身に
寄り添ってくれた。彼女の温かい支援
のおかげで、三日後にはブラハから日本
へ飛び立つことができた。同窓、同窓
の人の絆、希有の出会いによって、
浅井さん親子は救われたのだ。
そして三月十一日、子どもたちの手

を殺すようにして国境を目指す。「お
母さん、大変でしょう」そう言って車
掌さんが差し入れてくれた温かい紅茶
が、とても有難かった。

翌日、終点のひとつ手前の駅で下り
ると、そこは現地の市民ボランティア
の人たちで溢れていた。たった一人で
幼い子を連れて避難してきた浅井さん
に、多くのボランティアが寄り添って
くれた。無料のシャトルバスで国境の

芭蕉を知る留学生と 運命の出会い

学生時代、金沢で開催される留学生
ホームステイプログラムの開会式に、
通訊ボランティアとして参加してい
た。その時、隣に座ったウクライナか
らの留学生が、「伊賀に行ったことが
ある」と言った。

キーウ大学で日本語学科を専攻、担
当の教授は松尾芭蕉について本も出し
ていた。もちろん彼も俳句を学んでい
て初めて知った俳句は「古池や……」
とのこと。浅井さんの実家が糞虫庵の
すぐ近くということが、彼には僥倖の
ように思えたようだ。そして、運命の
出会いに導かれるように結婚に至った。

浅井さんが携わる ウクライナ支援活動



■ウクライナ料理の
レシピカード(写真
上)や教本「ペトリ
キフカ塗りの技法を
用いた『花の咲いた
小枝』の描き方(写
真下)の売り上げの一部を
ウクライナ国内の避難民の
食糧支援活動に役立ててい
ます。(この2点は岡森書
店白鳳店でも販売していま
す)



<https://epika-ukraine.booth.pm>
■浅井さんのお嬢さんが描いたイラストの
グッズ販売などの支援活動はこちらで。
https://suzuri.jp/Epika_StandWithUkraine
<https://haruny.base.shop>
■浅井さんの日常はこのブログから。ウク
ライナから帰国までをご自身の言葉で綴っ
ています。
https://note.com/dogirls_ua

「ウクライナは 伊賀みたい」

ウクライナの人々は自然や季節を大
切にしている、四季折々の景色や風情
を定型で表現している俳句に共感でき
る感性を持ち、日本人と通じるところ
があるという。
「ウクライナは伊賀みたい」と浅井さ
ん。キーウは首都で大都会でありなが

ウクライナと 日本の架け橋に

伊賀に帰って来て、お友達と一緒に
ひまわりの種を蒔いた。ひまわりはウ
クライナの国花だ。「ひ
まわりの花が咲くのを
見ながらパパのお家に
帰ろうね」。寂しがる
小さな姉妹の心を、浅
井さんは優しく勇気づ
ける。青空に向かって幾重もの黄色い
花びらが大きく大きく開くことを楽し
みに、毎日欠かさず三人でお世話をし
ているようだ。

「ウクライナはロシアを攻撃しようと
は思っていません。ただ自国を守るた
め、飛んで来るミサイルを打ち落とす
ための資金が必要です。日本からはウ
クライナが復興していくために力を貸
して欲しい。それが私からの願いであ
り、国民が最も望んでいることです」
吹奏楽部に入っていた高一の夏休み
にシカゴでホームステイした経験や、
高三で一年間オーストラリアに留学し
たことから、将来は国際的な仕事をと
思い描いていた。「その夢と少し違っ
たけれど、ウクライナと日本の架け橋に
なれるよう私のできるやり方で実行し
ていこうと思います」。あの闇のよう
な長い道のりを、幼い子どもたちを無
事日本へ連れ帰った母としての揺るぎ
ない強さが、これからの浅井さんの活
動の原動力になっていくのだろう。

ら、ご近所の繋がりがしっかりと生き
ている街、互いに優しさで譲り合い、
皆で助け合う文化が当たり前のよう
にあるのだという。子どもを連れてバス
や列車に乗ると必ず席を譲ってくれ
る。階段の前でベビーカーを止める
と、誰彼なしに走り寄ってくる。伊賀と
キーウと、人の温かさに全くギャップ
を感じないだけに、今のウクライナの
現状はただただ辛いです、と、浅井さ
んは目を伏せた。

ウクライナに残る夫とは毎日連絡を
取り合い、時差が七時間なので子ども
たちもリモートでパパと会話ができ
いるそうだ。4歳の長女が通っていた
幼稚園のお友達の半数はロシア語を話
すため、「ロシア」や「ロシア語」と
いう言葉は子どもたちには意識して使
わないようにしている。子どもの世代
にまでロシアへの憎しみを持たせては
いけないという思いから。プーチンと
いう悪い人がウクライナを奪おうとし
ている。だからママもウクライナを守
るために一生懸命お仕事をしているの

黒川喬雄先生の標本再評価

現職教諭が学会発表

上野高校の生物教諭、岡田峰尚さんは、上野高校に勤務になり、三重大学教育学部時代の恩師から、上野高校の生物学教室には黒川喬雄教諭が作成した貴重な植物標本が残されていることを聞かされたと言います。以下、岡田教諭の話の要旨です。

上野高校に着任後、さっそく二千種にも及ぶ伊賀地方の植物標本を目のあたりにして、あらゆる種類の植物が網羅され、その量に圧倒された。長い年数を経てのものも良好な状態で維持管理されてきたことを実感すると同時に、専門機関で維持管理する必要があると感じた。

何とか保存管理について三重大学や三重県立博物館に協力を求めて奔走するうちに、東京農業大学や東京大学の研究者の知るところとなった。現代的な分類の見解に照らして改めて系統的に分類することとなり、貴重な「亜科



標本を見る岡田教諭

三重県立上野高等学校に収蔵されているイネ科タケ亜科植物標本

支倉千賀子(東農大・農)・岡田峰尚(三重県立上野高等学校)・山本和彦(三重県)・池田博(東大博)黒川喬雄(1883-1971)は、三重県第三尋常中学校・三重県立上野中学校(現在の三重県立上野高等学校)で教鞭を執るかたわら、主に伊賀地方の植物の研究をおこなった。黒川は採集した標本を牧野富太郎(1862-1957)、中井猛之進(1882-1995)2)、小泉源一(1883-1953)ら、当時の植物分類学の権威に送り同定を請うとも

標本」やイガザサをはじめとする3品種が副基準標本(アイソタイプ)であることを確認した。

黒川先生の功績



黒川喬雄先生

上野高校創立百周年記念誌「自強百年のあゆみ」によると、1935年(昭和10)の上野城落成記念大博覧会に協賛して開催された「郷土教育研究大会」で黒川教諭は「郷土教育を趣味した中学植物科教授の要項」を発表し、「博物の黒川」としてその分野の研究者として学生の間にその名を語り継がれている人であると記されています。上中26回の沢村保昌さんは、カモシグサの花序模式図がなかなか書けないでいると先生は正しい図を示され、詳しくみると先生は無言のうちに教えられたと述懐しており、観察重視の姿勢と伊賀の生物学教育の発展をうかがい知ることが出来ます。

黒川先生は和歌山県田辺中学で勤務した後、大正7年1月に上野中学に赴任し、戦後の学制改革まで31年間教鞭をとられ、新制中学に移っての5年間で合わせて36年間を伊賀で自然観察指

導に、手許に重複標本を残した。また、在野の植物愛好家との交流もあり、簡井養之助ら当時近畿地方で活躍していたコレクターの採集品を受け取っている。黒川が持っていた標本は、現在は上野高校理科室に収蔵されているが、それらの中には牧野や中井、小泉らによって記載された分類群のタイプ標本の重複品も数多く含まれると考えられる。しかしながら、これまでイネ科タケ亜科については十分な検討がなされていなかったことから、上野高校に収蔵されているタケ亜科植物標本201枚について検討を行った。その結

ロート製薬CSO

瀬木英俊さんはロート製薬(取締役兼CSO(最高戦略責任者))として多角的な事業展開の「司令塔」を務めている。特に、伊賀工場が会社の主力拠点へ拡張されるのに立ち合い、郷土の豊かさを改めて感じたという。京都薬科大学を卒業後、米国P&G社の研究員を経てロート製薬に入社、マーケティング、新規事業開発などを担当し、2011年から経営企画の責任者に。また、国際医療施設、ゴルフ場などグループ数社の代

こんにちは 卒業



導と自然物の調査に尽力されました。1969年に黒川先生が上野高校生物教室と協力して発刊された標本目録「伊賀地方産植物目録」には昭和6年に新種として発表された学名 *Kurokawana Makino* 和名イガザサをはじめ1658種類の標本目録を取録。後の植物研究の標本基準として多くの文献に参照されています。取材 教頭 留永裕也(高32回)

瀬木さんの話

最初の会社で多くの分野の製品開発に携わり、アメリカ市場で初めて剤形のかぜ薬を開発・市場導入できた。ロート製薬に移ってまた多数の新製

伊賀に拠点企業で地域創生

品・新規事業の開発やグループの経営企画を担当した。成功は3割くらいか。が、失敗からの多くのことを学んだ。なによりチャレンジができたことに感謝している。異業種とのアライアンスや提携・M&Aも担当し、異分野での経営は貴重な経験となった。ロート製薬にとっての伊賀市

寄贈書紹介

石原健哉さん「光彩の奇跡」

花火アートの写真で知られる石原健哉さん(高9回)が新たに写真集を自費出版した。

巻頭には、フランス政府の芸術文化シユヴェリエ勲章を受けている長谷川榮氏が石原氏を「花火を現代アートに昇格させる見事なカメラ芸術のチャンスポレーション」と評している。70点に及ぶ光の芸術はそれぞれに「いち」追憶「たわむれ」などのタイトルが付されているとおり、実際には「一瞬の芸術」である花火を現代アートとして形をなす芸術へと昇華させている。

平成28年に伊勢志摩サミット開催記念としてハイトピア伊賀で展示された石原氏の作品を私が鑑賞した際の感動はこの写真集でも十分によみがえってくる。写真活動50年、花火に魅せられて20年。国内のみならず国際展でも数多くの賞をうけておられる。本書は二

しなど伊賀の魅力のな地域性が大きな選定理由となった。伊賀工場は次第に拠点化が進み、先端技術・国際基準・環境面などでのフラッグシップ工場になった。現在の社員数は500名を超え、地元の方も多い。

拠点工場と伊賀地域との繋がり

地域に密着し、地域も会社も元気になる活動「伊賀コネク」を推進し、子ども体験学習、学校への食育活動、にぎわいフェスタや天神祭への協賛など社員は地域との繋がりに燃えている。上野工場の製品を認

伊賀の乱ゆかりの寺で

また、天正の乱の契機となった織田方の丸山城に對峙して伊賀の国衆が立てこもったと伝えられ、日本遺産・忍者回廊の寺にもなっている。秋の彼岸法要では、乱の犠牲者の供養を行い、戦乱の世を経て素晴らしい伊賀を築き上げた先人への感謝、そして誇り高き伊賀者のことを想う時にしている。

藤田誠さん

藤田誠さん(高28回)が上梓された新著の奥付のページには、著者について「会社経営のかたわら、美術館を巡るツアーなどを主催する」とある。

学生時代、洒落本などを読む時は文章だけでなく絵の方も読むように教わった。たとえば、野暮な侍が出てきた時、その紋を見ると、作者が薩摩武士を意図して書いているとか……

藤田さんは江戸の女性の髷や化粧、着物の柄などから、その人の出自を推察し、画家の意匠を判じていく。浮世絵とともに、江戸時代の生活に対する教養がなければ不可能な仕事だ。大学で講義できるほどの学識に裏打ちされている。

八丁堀の同心でありながら、夜には悪を懲らしめる剣の使い手だった役を演じた同名の俳優を彷彿させる。しかし、著者はエンゼルスの大谷ばりの二刀流。会社経営の片手間に書かれたと

独立性・自立性があり、我慢強く、しなやかで、したたかでもあり、潜在価値は大きい。企業は地域価値の向上にも取り組むことで、より深く支える活動が広まると思う。

天正伊賀の乱ゆかりの寺で

02年に亡くなった父の跡を継いで天童山無量壽福寺という真言律宗の寺院で住職を務めている。この寺は奈良時代に創建され、永く檀家の方々に支えていただき、仏法興隆、先祖供養や未来祈願を行っている。

北村純一さん

上野高校の白亜の校舎には、広く世界で躍動する伊賀者が出てくるような力を感じる。多くの若者が、この校舎で学び、先人や地域から学び、将来の伊賀をつくることを支援できればと願っている。(取材 峠美晴 高32回)

伊賀の人・松尾芭蕉

芭蕉についての本は、書く人も読む人も、威儀を正して向き合うように思われる。北村純一さん(高18回)の新著は芭蕉を我々の身近にいそうな等身大で語る本である。著者は「芭蕉と其角」を小説化したことで芭蕉とその周辺に関する文献を多く読み込んだ蓄積を活かして朝日新聞伊賀版に「芭蕉の横顔」を長期連載した。それを再編集したのが本書で芭蕉の生涯の時間軸に沿って、芭蕉の句を取り上げながら資料に基づいたエピソード集を展開する。なぜ江戸に出たのか。江戸での生計は。敗れし者への共鳴。芭蕉と女性。忍者だったか。「大山師」。蕉門の罪人、離反などお堅い芭蕉論では出しにくい文芸が目次並んで読者を惹きつける。短章の集合であるため入り込みやすい。軽妙であるが勘所を押さえながらの語り口であるので「俳聖」が目前に近づいてくる一書である。(福田和幸 高18回)

同窓会の存在感を高める活動を



同窓会会長 左橋 佳三

上野高校同窓会員の皆様方におかれましては、益々ご健健にて、母校の教訓であります「自強不息」の精神をもつて活躍されておられますこと恐悦至極に存じます。平素は同窓会に對しまして、物心両面に亘りご理解、ご協力を賜わり誠に有難く心から厚く御礼申し上げます。

お蔭をもちまして、同窓会事業も例年通りでございますが、学校創立百周年の記念事業の一環であります、横光利一先輩を偲んでの「雪解の集い」を

はじめ、同窓会報「白垂」の発行に加え、五年前からは、文化系、体育系に開ならず全国大会、或いはそれに準ずる大会に出場される上野高校のクラブ、もしくは個人の生徒さんに激励金を贈呈しております。その他、毎年卒業生諸君の同窓会への入会式を挙行し、その場で卒業証書ホルダーを全員に贈呈する等、同窓会の存在価値の高揚に努める事業も展開出来ておりますが、まだまだ十分とは言えず、今後におきましても皆様方のご期待に添える同窓会運営に努めて参る所存でございます。

一方、新型コロナウイルスの感染問題が、予想以上の長期にわたり続き、そのうえロシアによるウクライナ侵攻に伴い、経済面を含めた社会生活に大きな影響を与え、それらが共に収束する兆しが見えない情勢で不安な日々が続きますが、会員の皆様方におかれましては、一層御自愛のうえご健勝にお過ごしになられますよう祈念申し上げます。

なお、同窓会報の発刊にご尽力頂きました方々にお礼申し上げますとともに、会員皆様方には、今後とも同窓会に對しまして一層のご理解、ご指導、ご協力を賜わりますようお願い申し上げます。紙面の都合上、言葉足らずとなりました事、ご容赦下さい。

SSH 文系プログラムも推進



校長 吉田 淳

同窓会会員の皆様には、平素から本校の教育活動に温かい御支援・御協力を頂いておりますことに、厚く御礼申し上げます。

また、上野高等学校の卒業生の皆様方が各界において活躍されていることは、在校生にとってこの上ない誇りであり、本校を卒業し未来へ羽ばたこうとしている者にとって、今後の大きな自信につながるものと喜んでおります。

初めに、今般の新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、健康面・経済面などにおいて被害を受けられた皆様に、心よりお見舞い申し上げます。また、一昨年度から引き続き、様々な同窓会活動についても中止・縮小せざるを得ない状況が続いておりますことを誠に残念に思います。

本校では、4月下旬から5月中旬にかけて生徒の間で感染が拡大したことから、一部のクラスで学級閉鎖の措置を取りました。しかし、その後は感染者もほとんど出なくなり、6月2日には3年ぶりに予定どおり体育祭をフルスケールで開催することができました。また、9月に予定されている文化祭では、感染対策の観点から調理を伴う取組や一般公開は差し控えるものの、全日制では3年ぶりに合唱コンクールを開催する予定です。

また、感染状況を注視しながら、修学旅行やクラスマッチなどの学校行事や探究活動も可能な限り実施していきたいと考えています。さて、ご存じのように上野高等学校では令和元年度から文部科学省よりSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の指定を受けています。この事業を受けて、本校は「地域の課題を解決するとともに、国際舞台で活躍することのできる人材の創出」を目指しています。この事業を最大限に活用して、現在様々な分野で活躍されている卒業

生の皆様といずれは肩を並べ、いつかは追いつくことのできる、そんな有為な人材を育成したいと考えています。SSHの取組も今年で4年目を迎え、第一期の目標である探究活動プログラムの構築についても最終段階に差し掛かりつつあります。しかし、一方で人文科学や社会科学に関する探究活動については、まだ不十分であり今後の充実したプログラムの開発に取り組みする必要があります。そこで、今年度から3か年の予定で新たに文部科学省の事業を受けて、人文科学や社会科学に関する探究活動プログラムの開発を目指すことといたしました。SSHの取組の一環として開発した「みらい探究F」のプログラムを深化・発展させることにより、大学で人文科学や社会科学に関する研究を目指す生徒への一助となればと考えています。

上野高等学校はこれからも日々邁進してまいります。今後とも卒業生の皆様からのご指導・ご鞭撻をお願いいたします。最後になりましたが、同窓会会員の益々の御健勝・御活躍をお祈り申し上げます。

古川タクさんのポストカード復刻



上野高校創立百周年時作成のものです。令和4年度総会にご出席の方に進呈します。

東京支部だより



場所を移した懇親会で和やかに盛り上がりました。

支部報「伊賀の友垣」第33号は10月1日発行で準備中です。

定例の東京支部総会懇親会を11月27日(日)、アルカディア市ヶ谷私学会館で4年ぶりの開催予定です。講演は作家の伊藤たかみさん(高41回)です。

伊賀の人・芭蕉と俳句は伊賀の文化の拠り所。芭蕉翁を盛り上げよう、東京支部で何ができるか試行模索を

始めました。詳しくは東京支部HP (https://iganotomogaki.jimdofree.com/) まで

報告 事務局長 實守健介(高18回)

報告 事務局長 實守健介(高18回)

令和2年度(令和2年9月1日~令和3年8月31日) 上野高等学校同窓会一般会計収支決算書

令和3年度(令和3年9月1日~令和4年8月31日) 上野高等学校同窓会一般会計収支予算書

令和4年度(2022年) 総会のご案内
とき 10月29日(土)
14:00~記念講演 15:00~総会 16:00~懇親会(会費3,000円)
ところ ヒルホテルサンピア伊賀
伊賀市西明寺 2756-104 ☎0595-24-7000
記念講演 (市民公開講座)
日本アニメーション協会会長
講師 古川タクさん(上高11回)
演題 「アニメーションよもやまばなし」
*昨年度の企画がコロナ禍のため中止になりましたので、本年度、あらためて開催します、古川さんの紹介は前号に詳しく掲載しています。
懇親会アトラクション ピアノの夕べ
二組の親子ピアニストによる競演
桂 富佐・真由さん ● 杉本 久美・奈穂さん
(高33回・63回) (高33回・64回)